

京都にもあつた空爆

久郷 隆幸

“ドドン！”耳をつんざく音と同時に地響き、何事が？ おふくろとあわてて、テーブルのしたにもぐる。「爆弾や」とおふくろが叫ぶ！

これが昭和二十年一月十六日の真夜中、私が十歳（修道国民学校五年生）の時だった。

この日は、午後十一時三十分頃にかなりきつい地震があり、多くの人々がまだ起きていたと思われるなかでの爆撃だった。

表通りが騒がしくなり、人々が何かを叫びながら走っていく。消防車がけたたましくサイレンを鳴らしながら東の方へ走っていく。私も空襲警報のサイレンが鳴り響くなか、外へ飛び出し近所の人々と一緒に走っていくと、ものすごい火柱が何軒かの家から上がっていた。坂を登っていく人々の中には足を滑らせ倒れている人もいる。この日は非常に寒く、消火栓の水が坂道でまたたく間に凍る状況だったことを思い出す。

この出来事が、京都で初めてのアメリカ軍の爆撃だったと思う。爆撃された場所は、京都市東山区東大路通渋谷（馬町）東入ル下馬町・上馬町一帯、我が家から東へおよそ百メートルぐらい行つ

たところだった。被害の状況は、汐文社発行「かくれていた空襲」と三省堂発行の「日本の空襲―六」の資料によると

死者 四十一名（内小学生八名）

負傷者 五十名

家屋全壊 二十九戸

半壊 百十二戸

一部損壊 百七十五戸

と記録されている。

一夜明けて学校へ、登校というよりも「どないになっているやろう」と思って見に行くと、各教室の窓ガラスの破損は勿論、壁・柱等いたるところに爆弾の破片が突き刺さっている惨憺たる光景を眼の辺りにして、愕然としたことを思い出す。

この後まもなく、私達国民学校四年生以上の児童は、集団疎開で現在の府下・京北町へお世話になることになった。疎開先は平屋村の三つのお寺に分宿、私のお寺は、村で一番大きい正覚寺さんだった。

行った当初は、修学旅行気分で広いお寺の本堂で枕投げなど毎晩のように、わいわい騒いでいた。しかし、時が経つにしたがって、家に帰りたいと泣き出す者や、逃げ出す者など大変な

毎日が続いた。

疎開生活で一番辛かったことは、地元の学校での昼食の時だった。私達の弁当箱の中は空っぽ同然で、朝、弁当をもらってお寺の廊下でトントンと二、三回たたくと、弁当箱の隅つこにささやかに片寄っているので、二、三回口に運ぶと終わってしまふのだ。それにひきかえ、地元の子供の多くは、ドカ弁に銀シヤリがぎつしりとつまっている。こんな地元の子供たちの姿に、私達は羨ましさで情けなさから教室を飛び出し、裏山に入り山芋や草の実など食べられるものを片っ端から探して食べるなど、すきつ腹の足しにしていたものだった。

しかし、一方では楽しいことも多くあった。とりわけ、お寺の前を流れる大堰川での「あゆ」の掴み取りは本当に面白く、「あゆ」が捕れなくても、多くの仲間と一緒に水に親しみ、皆んな上手に泳げるようになったことなど、忘れることの出来ない楽しい思い出である。

京都で初めての爆撃に遭い、八名の仲間を一挙に失った悲しみを胸に秘めつつ、戦後私達は、新制中学、高校へ、また就職へと歩む道は異なっても、戦争の惨めさや空しさがお互いに深い傷となつて残っている。

私は、多くの人々のご厚情、ご友情に支えられて今日を迎えることが出来たが、『二十世紀への伝言』へ投稿しようとして改めて過去を振りかえり、子供のとくに受けた忘れることの出来ない辛い、辛く悲しい出来事を思い起こすと、人間同士が殺しあふことの愚かさにやり場の無い憤り

を新たにしたのだった。

いま世界では、いろいろな口実でもって大儀名分をかかげ、人間同士が殺しあう戦争を肯定する雰囲気復活しつつあるように思える。

いま一度、戦争の全否定を真剣に考えるべきときではないだろうか。

